

# 硬質施釉陶器の技術を調べる — 押小路焼 —

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

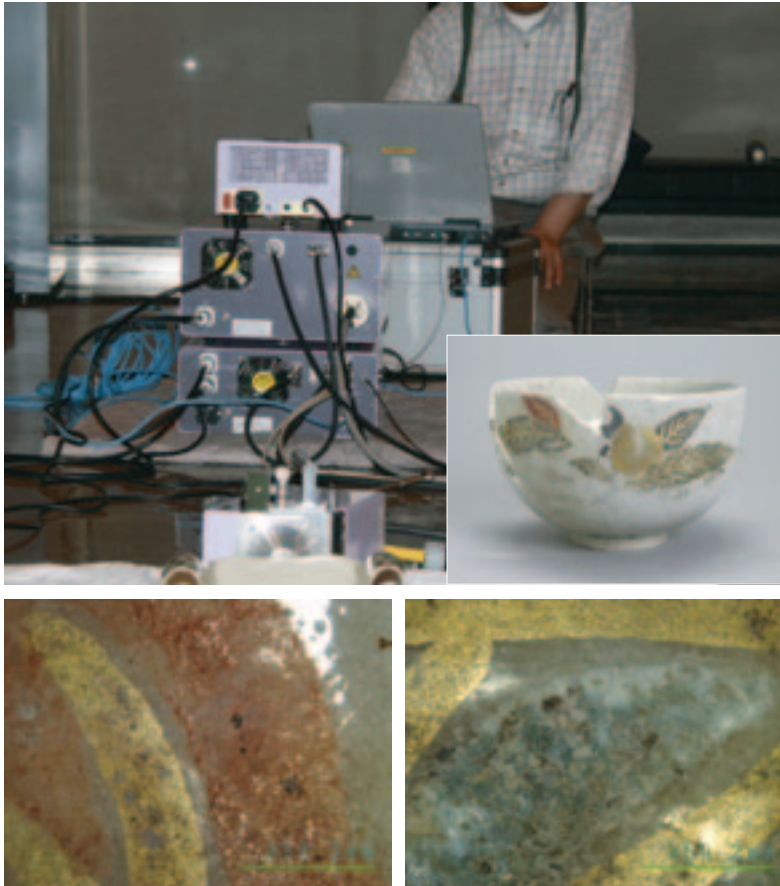


図1 蛍光X線分析装置を用いた調査の様子と色絵碗(上)・拡大写真(下)

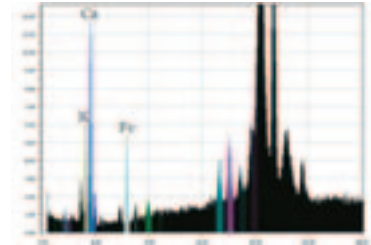


図2 透明長石釉の元素

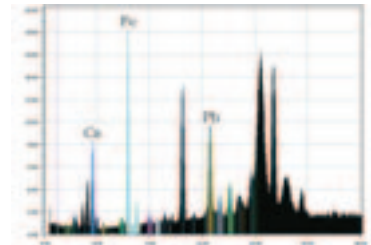


図3 赤色絵の元素

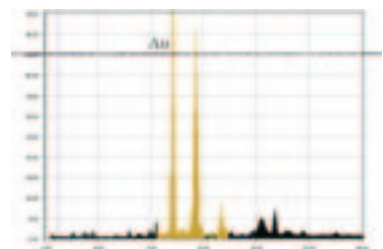


図4 金彩の元素

はじめに 前回は、軟質施釉陶器の施釉技術を、理化学的な科学の目から見ました。今回は、尾形乾山が『陶工必用』に京焼のルーツの一つにあげた押小路焼との関連性が指摘される、御池通柳馬場東入る東八幡町から出土した作りかけの陶器の破片資料を取り上げ、次の仁清や乾山との技術的なつながりを見ていきます。

下絵は墨描きか呉須描きか？ 当地から出土した陶器の未製品は、軟質施釉陶器と仁清窯をつなぐ押小路焼の技術変遷を知るうえで参

考になります。

素焼きに描かれた下絵が、墨描きか呉須描きなのかを調査しました。墨ならば高温のために消えてしましますが、呉須であれば青い染付の陶器となります。

結果は、呉須成分の最大の特徴であるコバルト(Co)は見出されず、墨を使っていたことがわかりました。繊細なタッチで描かれた楼閣の墨絵は、単なる下絵ではなく完成した上絵付けをイメージした見本品かもしれません(リーフレットNo.243・写真1)。これとは別

の未製品に、墨絵の上をぼってりとなぞった白い物質がありました。調べると、墨絵の下書きの上に鉛を含んだ下絵の具で色をつけた未製品と考えられます(リーフレットNo.243・写真3)。

上葉に長石釉が登場する時期東八幡町からは1620~30年代ころの軟質施釉陶器の茶陶の未製品とともに、やや年代が下る1650年代ころの硬質施釉陶器の未製品も出土しています。このような硬質で薄手の陶器茶碗を焼くには、登窯による高温焼成が必要です。

分析の結果、この薄手茶碗の上薬（釉薬）は、800 前後の低温で溶ける鉛釉ではなく1200 以上の高温ではじめて透明でタイトなガラス質ができる長石釉でした。このことから、京の焼物の上薬に長石釉が登場するのは、この1650 年前後と考えられます。

金欄手と色絵の上絵付けの開始  
京焼の、繊細で華麗な洗練された金欄手をも交えた色絵陶器の完成は、野々村仁清や尾形乾山らの登場以降といわれます。それは、当地で長石釉を用いた薄手茶碗である硬質施釉陶器が作られた1650 年より少し後のことです。ところがこの薄手茶碗の中には、金彩、赤色絵、緑色絵、濃紺色絵などがカラフルに上絵付けされた金彩色絵碗が含まれていました（図1）。

分析した結果、上薬は長石釉で、上絵の具の赤色絵はベンガラ、緑色絵は緑青、濃紺色絵は呉須を着色材料とした鉛を含む釉薬であることがわかりました（図2・3）。金彩は金(Au)のみであり、鉛成分は認められませんでした（図4）。これらはいずれも、細かい気泡を含んだガラス質の上薬の上に乗せられていました（図5）。

この金欄手色絵陶器の工程は、薄い陶胎の茶碗素地を作る素焼き 上薬である長石釉掛け



図5 上薬の釉薬

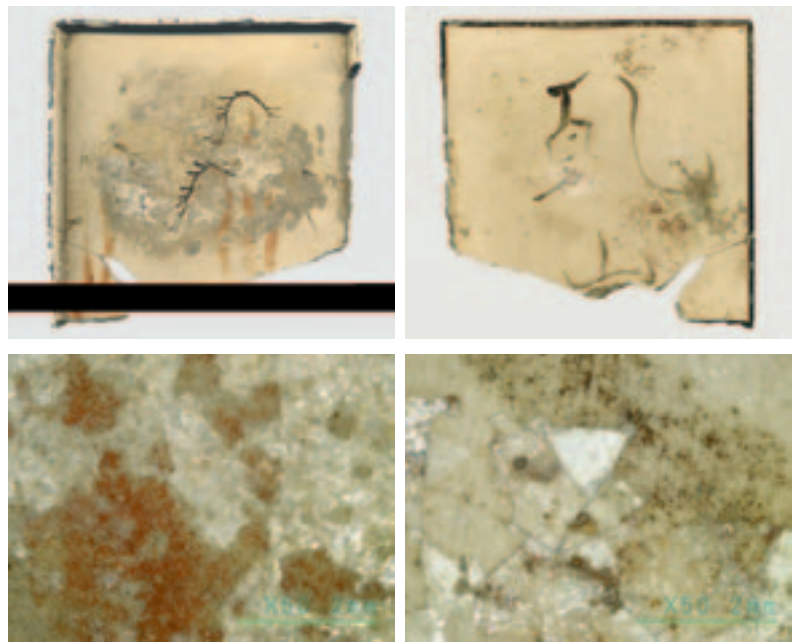


図6 乾山銘の角皿（上）・拡大写真（下）

登窯で高温焼成による本焼き鉛を含んだ上絵の具で色絵付け 金炭窯きんすすみがまで低温焼成して色絵を定着 金粉(金泥)を布海苔や膠、硼砂ほうしゃなどに溶いて金彩色絵よりも低温で焼成して金彩を定着 金彩部分を磨いて最終仕上げを行なう。

これらは、のちの仁清や乾山によって完成されたとされる色絵陶器と同じ技法でした。すでにこの時期には、ほぼ完成した京焼の色絵技術があったと考えられます。

仁清・乾山の技術 京都市内では、仁清窯をあらゆる小判形枠の印が押された硬質施釉陶器や、乾山窯作成の染付け陶器も出土しています。今回、このうちの数点も

調査しました。その結果、長石釉の上薬施釉と褐色系の鉄釉模様からなる仁清窯の高温焼成による硬質施釉陶器や、乾山窯作成の呉須染付けの硬質施釉陶器など、今日の京焼につながる絵付けの技術も多く見られました。

その中で注目されるのは、表面に鉄サビやベンガラで絵柄が描かれ、裏面には「乾山」銘が筆書きされた角皿の存在です。これは、素焼きの上に白泥を塗って白いキャンパス地に見立て、絵や乾山銘を描き、透明な鉛釉の上薬を薄く上掛けして低温焼成で焼かれた軟質施釉陶器でした（図6）。

絵の発色やタッチを、より効果的に引き立たせるために、低温焼成の軟質陶器の肌合いと薄い透明鉛釉を採用しています（図7）。さすがに乾山窯では、軟質施釉陶器以来の技術を熟知しており、作品によっては硬質陶器と軟質陶器の両方の技法を使い分けていたようです。（北野 信彦）

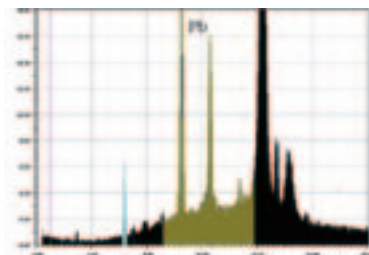


図7 透明鉛釉の元素